

第2章 1950～60年代のベトナムの植物図鑑にみる シナモン

小田なら

日本学術振興会特別研究員 PD

1 はじめに

本稿は、ベトナムで発行された3種の植物図鑑および薬用植物図鑑を取り上げ、それぞれ薬用植物資源としてシナモンに分類される植物がどのように記載されているのかを紹介するものである。

ここで取り上げる3種の図鑑は、1950年代南北分断前に発行された薬用植物図鑑と、1960年代に南北ベトナムそれぞれで発行された薬用植物図鑑および植物図鑑である。

これらの図鑑の具体的な記述を比較・検討することにより、まずは、出版当時の特定の（薬用）植物をめぐる生産地域や科学的認識が明らかとなる。さらには、こうした複数の時代・地域で出版された図鑑をとおし、仏領インドシナ期にベトナムに持ち込まれた近代の植物学・薬学知の影響を解明できるだろう。

以下では、3種の図鑑の特徴を確認し、シナモンを事例にそれぞれの図鑑における記述を比較し、上述の比較研究の可能性を示したい。

2 資料の概要

① 1950年代初頭の図鑑（サイゴン発行）

『カンボジア、ラオス、ベトナムの薬用植物』（‘Les Plantes médicinales du Cambodge, du Laos et du Vietnam’）

全4巻（第4巻は索引集）にわたるフランス語による薬用植物図鑑である。巻頭言によれば、主に仏領インドシナ期に発行された植物図鑑を参考に作成され、1952年から1954年にかけて出版された。第1巻は科学技術研究所傘下のカンボジア・ラオス・ベトナム農学研究史料館（旧インドシナ農業研究所史料館）が発行したが、第2巻以降はベトナム国のベトナム農学・牧畜学研究史料館による。このことから、発行場所は明記されていないものの、ベトナム国の首都サイゴンで発行されたと推測される。また、第1巻の最終頁には極東学院

(I.D.E.O) と脚注部分に印字があることから、あくまでこれはベトナム国内で発行されたものといえる。

各植物の項目に図版は含まれないが、多言語で名称が記載されているのが特徴的である。

項目にあるラテン語名のほか、場合によっては中国語名（漢字）、現地語名（ベトナム、カンボジア、ラオスのいずれかも明示）、「P.M.S.」による名前がローマ字で記載されている。本図鑑で P.M.S. とは Populations Montagnarges du Sud のこととあり、直訳すると南の山の民、すなわち南部の中部高原あたりの少数民族のことを指すと考えられる。

筆者はこの図鑑のコピー版をハノイの古書店で入手した。

② 1960 年代の図鑑（南ベトナム・サイゴン発行）

『ベトナム南部の植物』（ファム・ホアン・ホ（Phạm Hoàng Hộ）著、ベトナム国家教育省、1960 年）

この図鑑は 1960 年の発刊後、1972 年に第 2 巻が刊行された。簡単な植物の図版と特徴が記載されているものの、あくまで植物図鑑として編纂されているため、薬効の解説はない。前述①とは異なり、編纂者ファム・ホアン・ホは南部で見られる植物に特化して本図鑑を編んでいる。各項目にはラテン語名とベトナム語名が併記されているが、漢字での記載はない。

編纂者ファム・ホアン・ホは、1929 年（あるいは 1931 ともされる）にメコンデルタのカントーで生まれた植物学者である。1946 年に渡仏、高等教育を受けたのちに 1957 年に南ベトナムに帰国した。南ベトナム各地で教鞭をとり、1966 年にはカントー大学の設立に携わった。1984 年ごろには再び渡仏し自然科学博物館で研究を進め、2017 年にカナダで没した¹⁾。

この図鑑のように、南ベトナム時代には南部に特化した研究をおこなっていたものの、南北統一を経た 1990 年代には『ベトナムの植物』図鑑（全 2 部、6 巻。1991 年～1992 年）を出版、2000 年代には『ベトナムの薬用植物』図鑑（2006 年）も編纂している。

現在、日本国内ではアジア経済研究所図書館が所蔵している。

③ 1960 年代の図鑑（北ベトナム・ハノイ発行）

『薬料学とベトナムの薬味』第 2 版（ドー・タット・ロイ（Đỗ Tất Lợi）著、保健省医学出版社、1961 年）

この図鑑の巻頭言によると、ハノイ医薬科大学の学生に向けたものとして執筆された 3 巻本である。第 1 版は 1957 年に医薬科大学が出版されたものがあるが、筆者が確認できているのはホーチミン市で入手した第 2 版である。

1) 元学生の Lê Học Lãnh Vân による回想記事 “Giáo sư Phạm Hoàng Hộ, một người thầy của tôi” <https://1thegioi.vn/giao-su-pham-hoang-ho-mot-nguoi-thay-cua-toi-17001.html> (2021 年 3 月 8 日アクセス) による。

各項目は各種薬料植物について1頁程度で解説され、場合によっては図版が添えられている。ただし後述するように、シナモンについては5頁以上の紙幅が割かれている。

上記二冊の図鑑と異なり、ここでは各項目の説明に化学構造についての解説が加えられている。この図鑑はベトナムの在来の植物について化学構造を含めた薬学からのアプローチで分析し、学術出版物としてまとめた最初の成果ともいえる。著者のドー・タット・ロイ（1919～2008）はハノイ近郊ソクソンの出身で、ベトナムで最も有名な薬学・植物学の権威の一人である。この図鑑の数年後に彼の編纂で刊行された『ベトナムの薬用・薬味植物』（1962年）は、これまで少なくとも14版まで版を重ねている。

ドー・タット・ロイは②の編者とは異なり、仏領期のインドシナ医薬科大学で薬学を学んだ。卒業後にはインドシナ戦争（抗仏戦争）に越北地方で軍医と協力することとなる。これをきっかけに、各地でのベトナムの薬草についての科学的研究を始めることとなった。この図鑑の冒頭で「ベトナムの薬学の歴史」について解説する項目が設けられているのは（この点について詳しくは今後別稿で論じたい）、編者ドー・タット・ロイのこうしたそれまでの経歴と時代背景によるものといえよう。

3 3つの図鑑にみられるシナモン

以下では、各図鑑に記載されたシナモンについて、記述の特徴的な部分を取り上げる。

①『カンボジア、ラオス、ベトナムの薬用植物』（‘Les Plantes médicinales du Cambodge, du Laos et du Vietnam’）におけるシナモン

この図鑑では、以下の6種のシナモンの情報が記載されている。

Cinnamomum Burmannii Bl.

ベトナム語：Trên trên, Trên trên trắng, cây quế rãnh

中部ベトナムとラオスに生育する。中部ベトナムでは、産地によって皮と葉の香りに差がある。タインホア（清化）では、中国人が薬料のために購入する。様々な方法で下痢、熱（インフルエンザ）、マラリアの治療に用いる。

Cinnamomum Cambodianum H. Lec.

現地語：Tep pirou（ラテン語名の記載はない。）

木は25mの高さまで生育する。健胃、抗菌効果。消化不良や月経不良に効果がある。

Cinnamomum Caryophyllus Moore.

ベトナム語：Quế rãnh（桂杼）

南部ベトナムの森林に生育するが、人間の居住地では見られない。しかし、生育地はより広範囲と考えられる。〔例えば〕タイグエン（北部）近くの

Van-Gia に位置する Sauêr 氏のプランテーション（現在は Nguyen Kim Lan 氏が所有）で 3 本生育しているのが発見されている。根と茎の皮は香り高く、クローブに似た油分を含む。1914～18 年の戦争ではクローブのエッセンスの代替として生産を試みたが、失敗した。

Cinnamomum Cassia Bl.

中国語：Kuei（桂）、Kuei p'i（桂皮）

ベトナム語 Quế đơn（桂丹）、Quế bì

カンボジア語 Sambor lo veng.

インドシナ全域と中国南部に豊富に生育する。香り高い皮は薬となり、単独もしくはほかの薬料と組み合わせて使用する。消化不良や疝痛に効果がある。中国の物流において重要であり、広東から全世界へ輸出される。カンボジアでの Dr. Menaut の研究によれば、下痢の予防、抗菌作用があるといわれる。

Cinnamomum Iners Reinw.

ベトナム語：Quế rừng（桂稜）、Hậu phát

カンボジア語：chek tum, Samplan.

南部ベトナム、ラオス、カンボジア、インド諸島、インドネシア、マレーシア、フィリピンに生育。皮はカンボジアでは採集され尽くし、大きなものはめったに見られない。皮は香りが強く、線香の生産に用いられる。カンボジアでは治療にも用いられる。葉も薬料となり、根とともに用いるとリュウマチに効果がある。

Cinnamomum Loureirii Nees

中国語：Zuk kuei（肉桂）、Kouei xu, Kiokui.

ベトナム語：Quế

主に北部・中部ベトナムで生育する。この種の樹液は他と異なり辛みが少ない。中国商人は皮にナイフで傷をつけ、エキスをチェックしている。胃腸を整えるが、むやみに服用してはならず、生ニンニクは禁忌である。この種は以下の 2 つのグループに分けられる。一つは北部ベトナム：タインホア（清化）とゲアン（乂安）のもので、野生種。タインホアでは南東の Trinh Van（Thuong Xuân）と Dong châu の西（Phu xuân）で主にみられ、前者のものが最も貴重とされる。もう一つはアンナン中部、すなわちクアンナム（広南）とクアンガイ（広義）のもので、野生種と栽培種がある。これらは北部ベトナム産よりも価値が高い。Tiên Phuoc（チャーミー・Trà My の中心）、Thang binh、Quê Son で見られるが、チャーミーの北からはプランテーションは見られなくなる。

以上のとおり、この図鑑では名称のほか生育地や利用法が記載されている。さらに 6 番目に挙げられた肉桂（Quế）については、1927 年の時点で中部においてプランテーションがあったとも記載されている。この記録によれば、中部

ベトナムの2省で数千ヘクタールのシナモンプランテーションがあり、それらの価格は品質によって大きく異なっていたという。

②『ベトナム南部の植物』におけるシナモン

上記の図鑑に比べて記載内容は非常に限られているものの、各種シナモンの分布地域を把握することができる。

Cinnamomun zeylanicum, Bl / Quế; Cinnamon tree: Cannelier

皮は非常に香り高い。中部に生育する。

Cinnamomun argenteum, Gamble / Quế bạc

クアンチに生育する。

Cinnamomun litseaefolium, Thw. / Quế Bời lồi

フーコックから Titin まで生育する。

Cinnamomun Burmannii Nees in Wall. / Quế rừng, Quế trên

常緑林で生育する。ニャチャン、ダラットに生育する。

Cinnamomun obtusifolium Nees in Wall. / Quế lá tà

Phước tuy に生育する。

Cinnamomum albiflorum, Nees in Wall. / Quế hoa trắng

フエに分布している。

Cinnamomun iners Reinw. / Ô dước, Quế rừng, Hậu phát

フーコック、Thử đức、Bà rá (Bà ría、バーリアのことか) に分布

Cinamon Cassia, Bl. / Quế đơn

通常、森林に生育する。Thử đức や Phước tuy に分布している。

Cinnamomun Bonii Lee. / Quế Bonii

チャウドックの森に見られる。

Cinnamomun validinerve var. *Poilanei* Liouho / Quế gân-to

クアンチで見られる。



図1 *Cinnamomum albiflorum*, Nees in Wall. / Quế hoa trắng のイラスト (『ベトナム南部の植物』226 頁)

③『薬料学とベトナムの薬味』におけるシナモン

本図鑑の第1巻で、シナモンは6頁にわたって解説されている。他の植物の情報が1頁程度に抑えられていることと対照的に、シナモンについては売買前の加工過程まで詳しく述べられている。以下はこれまで紹介した図鑑①②とやや形式が異なるものの、できる限り本図鑑の記載方法をそのまま転載する。

Cây quế

別名 Quế rừng, Quế quan, Quế đơn, Quế bì, Quế thanh, Quế chi

ラテン名

---*Cinnamomum obtusifolium* Nees.

Laurus obtusifolia Roxb.

---*Cinnamomum zeylanicum* Nees.

Cinamomum aromaticum Graf. *Laurus Cinnamomum* Roxb.

---*Cinnamomum cassia* Bl.

シナモン (Cây quế) には三つの分類がある。

1) Quế rừng, Nhực quế (中国名)

Cannelier royal. Cinnamomum obtusifolium Nees --- *Laurus obtusifolia* Roxb.

13-17mの高さとなる。チュオンソン山脈に生育。とりわけ Quế Thanh がもっとも貴重。

2) Quế quan

Cinnamomum zeylanicum Nees. *Cinamomum aromaticum* Graaf --- *Laurus Cinnamomum* Roxb.

南部 (タイニン) に生育し、Xây lăng (セイロンのことと考えられる) でも植えられる。

3) Quế đơn, Quế bì

Cinnamomum cassia Bl.

北部、南部、中部、ラオス、中国でみられる。

地理的特徴

ベトナム・カンボジア・ラオスに生育。タイグエン (ドンバム)、イエンバイ、クアンガイ (チャボン川の右岸に 1000 本) ではある程度の規模で栽培されている。

チュオンソン山脈の南北にも分布。ただし開発されているのはクアンナム、クアンガイ、タインホア、ゲアンのみ。

栽培・収穫について

500m 以上の高地、比較的乾燥した土地が適合する。湿度の高い土地では精油が少なく味は苦くなる。比較的暖かい場所のほうが樹皮の生育によい。

皮の採取は 5 月～10 月におこなう。10 年以上のものを採取するべきだが、経済的理由から人々は 4 年目のものを収穫している。根元まで切り、2 年後にまた収穫する——というサイクルを繰り返す。

Quế rừng であれば樹齢 40～50 年で収穫する。タインホアでは、以下のよう
に収穫する。幹に沿って竹のような節をつくり、枝を上から下まで削ぐ。
幹だけになれば、切っていく。各々、長さ 30～40cm、幅 7~8cm となる。
皮をはぎ取るには、水牛の角を用いる。

採取後の作業として、木か骨のヤスリで表面と内側を滑らかにする。

優良品の分類について

- 1 級品：木の幹から採れた皮。長さ 0.40 ～ 0.50 (m?)、幅 0.05 ～ 0.10 (m?)。さらに、上部の幹で東方向のものが最良。
- 2 級品：大きな枝から採れた皮と地面に近い幹から採れたもの（香りが劣る）。
- 3 級品：枝からの桂枝 (qué chi)。
- 4 級品：Qué xô すなわち枝と皮が混在し、サイズがそろわないもの。

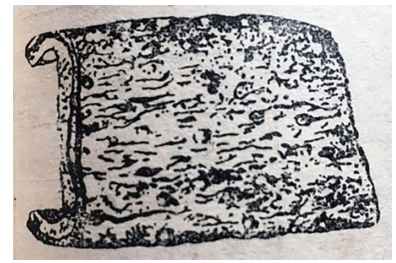


図 2 加工後のシナモンを示した図版（『薬料学とベトナムの薬味』203 頁）

産出地による分類について

タインホアのものが最良とされ、中国人も好む。Qué Quỳ（ゲアンのクイチャウ産）が次に来るが、タインホア産の 60% の価値しかない。

樹齢 20 年のシナモンからの採取量：

1 級品 5kg

2 級品 3kg

桂枝と品質の劣る皮 4 ～ 5kg

全国の生産量は 1500 ～ 1800 トン / 年。北部は 200 ～ 300 トンを生産する。大部分は香港へ輸出されたのち、中国かアメリカへ売り込まれる。

利用部分

幹の皮と枝。葉からは精油を抽出する。

シナモンは精油によってその効能を発揮する。覚醒・殺虫作用があり、静脈に作用する。

心拍数・呼吸・腸の蠕動収縮を増加させるが、わずかに体温を上げ、鼻水・涙が出る。また、消化不良、衰弱に効き、止血薬の補助薬となる。

4 おわりに

ここまで紹介したように、ベトナムでは 1960 年前後の時点で、近代薬学あるいは植物学の学知で分類された図鑑が発行された。編者や発行元の経歴・背景からは、いずれもこの時代の図鑑は何らかの形でフランスによる薬学・植物学の系譜が反映されていることがわかる。その一方、3 つ目の図鑑で明らかに見られるとおり、在来知識についても詳しく記載されている。

こうした図鑑を史料として扱う上でシナモンを例にとると、以下の二点が重要になると考えられる。一つは、シナモンの分類とベトナム語（あるいは少数民族の言語の）呼称についてである。シナモンのラテン名の分類は 1960 年前後でも南北の図鑑を見ると統一されておらず、さらにはラテン名と現地語との

整合性が見られないものがある。南北ベトナムの記載内容の差異について、今後さらなる植物図鑑の調査が必要である。

もう一つは、シナモンのプランテーションが少なくとも 1960 年以前は各地で見られていた点である。3 目目の図鑑では香港経由で中国やアメリカへ輸出されていたことに加え、インドシナ戦争勃発以前のシナモン生産量が記載されている。きわめて断片的な情報ではあるが、プランテーション栽培や輸出品としての生産量の増大とシナモンの科学研究の進捗は決して無関係ではないと推測される。このように過去の薬用植物図鑑は、発刊当時の研究や植物の位置づけを示すだけでなく、歴史的論点を提供してくれる資料でもある。今後は、ここに示した 2 点の論点を中心に、さらに図鑑の記載内容と関連文献を分析していきたい。

参考文献

- Centre national de recherches scientifiques et techniques (1952-1954) *Les Plantes médicinales du cambodge, du laos et du Vietnam*. Archives des Recherches Agronomiques au Cambodge, au Laos et au Vietnam.
- Đỗ, Tất Lợi (1961) *Dược liệu học và Các vị thuốc Việt Nam*, Bộ Y tế Nhà xuất bản Y học.
- Phạm, Hoàng Hộ (1960) *Cây-cỏ Miền nam Việt-nam*, Bộ Quốc-gia Giáo-dục.

インターネット記事

- Lê Học Lãnh Vân (2017) *Giáo sư Phạm Hoàng Hộ, một người thầy của tôi*. <https://lthegioi.vn/giao-su-pham-hoang-ho-mot-nguoi-thay-cua-toi-17001.html> (2021 年 3 月 8 日 アクセス)